

神明山古墳

神明山古墳は、4 世紀末～5 世紀初頭に古代丹後王国の支配者のために建てられたとされる、鍵穴型の古墳です。この神明山古墳は日本海に沿った場所では 2 番目に大きな鍵穴型の古墳で、この時代の丹後王国の豊かさの証明となっています。研究グループは、神明山古墳はこの地域のかかなりの労働力を利用し、少なくとも 5 年はかけ、190 メートルの長さの古墳を作ったのではと推定しています。神明山古墳の構造は、他の大きな丹後の古墳に似ています。古墳は 3 層構造で側面に丸い石（葺石）が重ねられ、周囲にはおよそ 2,000 個の埴輪が飾られています。またこの時代につくられた同様の鍵穴型の古墳に見られるように、大きな石の埋葬室が丸い部分にあると考えられています。

この古墳は建設当時、この文明とアジア大陸の貿易相手をつなぐ潟湖を見下ろしていました。この墳丘は外から見たときに支配力を示す存在であり、水際にそびえ立つ丘となっています。現在潟湖はなくなり、地面は植生に覆われています。しかし、森の地面に葺石のかけらを見つけることがあるかもしれません。

神明山古墳では発掘調査は行われていないため、遺物はほとんど回収されていません。しかし近くの丹後古代の里資料館には、小舟を漕ぐ人の絵が刻まれた、埴輪の断片が展示されています。